

東亞天文協會
—(觀測部月報欄)—

流星課月例報告 (63)

昭和11年1月及2月

觀測者	觀測地	1 月			2 月		
		回数	時間數	流星數	回数	時間數	流星數
本田 實	鳥取縣八東村	1	20	5			
小横 茂代	和歌山縣金屋	1	20	25			
宇野 良雄	京 都 市	3	270	37	1	60	2
吉井 耕一	竹原, 金屋	7	704	153	9	1314	154

觀測數は少い。吉井氏の活躍は目覺ましい。

1月上旬の四分儀流星群は月の妨害がなかつたが、宇野 小横(茂)吉井3氏によつて比較的よく觀測された。出現の程度は4日朝最も多く1時間20個位で、特に曉に近く其の數を増した傾向がある。午前5時に於ける太陽の黄經は102.°3で、神田清氏の發表の極大時刻に甚だ近い。

宇野、吉井2氏の觀測から輻射點を夫々1個宛決定し得たが、この外に同じ朝この群の從屬的輻射點とも見るべきものが吉井氏の觀測中にある。

この群に屬する大流星(−2等以上)が4個觀測されてゐる。又同じ4日朝北冠座及牧夫座 γ 附近にも一流星群の活動が兩氏によつて認められた。

1月下旬より2月上旬に互つて活動する牧夫座流星群は、宇野氏によつて1月30日及31日兩夜觀測されたが出現數は甚だ少數であつた。(小横)

遊星面課月報 (7月)

7月に入つて Seeing, Definition 共に急に良くなり、見取圖は加速度的に急

増した。先づ見取圖受領數を下記す(7月末迄の合計數)。

	福井	木邊	服部	小澤	西森	坂井	前田	宇野	渡邊	安武	伊達	合計
木星	1	3	4	1	1	6	21	1	15	25	25	81
土星	0	0	0	0	0	0	0	0	6	2	2	2

この外に、渡邊、伊達、前田三氏より大赤斑の部分見取圖各1枚受領す。

今上記の見取圖より木星兩星の概況を記すと：——

木星一各縞の濃さには變化無し、縞の濃さの順位は北赤道帶縞、南溫帶縞、北溫帶縞、南赤道帶縞、赤道帶、南々溫帶の順で、南極部は北極部に比し大分暗く、特に南極端は黒い、南熱帶は最も白く、特に大赤斑の周圍は白く輝いてゐる。色は渡邊氏によると南北極部は青褐色、南溫帶縞は青味がかつちチョコレート色、大赤斑は桃色、南赤道帶縞は淡い茶色、赤道帶は淡黒く、北赤道帶縞はチョコレート色に、少し赤を含めた色、北溫帶縞は淡い褐色となつてゐる。尙火星、木星共に色の觀測には中程度の倍率、色消しアイピイスを用ふるを良とす。屈折では縞が紫色がかつてしまふが反射では明瞭に見える。縞は北赤道帶縞が最も複雑で、濃淡凹凸入り亂れてゐるが、渡邊氏の15cm、服部氏の21cm、木邊氏の31cm、でそれ等を細かく見てゐるが、他の小口径には大體の濃淡凹凸以外詳しくは認められてゐない。

大赤斑の形狀は前田氏は正橢圓形に東西に黒い Spot 2つを認められ、渡邊氏は舟形にて渡部は角張つてゐる。伊達幹事はタンク(戰車)形に見てゐる。小口径にも正しい橢圓形でない事は判るが、しかし正確な形は不明。木星の詳細については後日まとめて天界誌上に發表の豫定。

土星一非常に觀測が尠い。多分未だ7月では觀測に適當な時刻に昇らぬ爲だらう。アンサの消失、出現は曇天が多かつた爲見事に逃した。渡邊氏が只1人消失、出現の前後5枚の見取圖を得られた(天界前號参照)木邊幹事(10樞北海道にて)、渡邊氏、伊達幹事の觀測を合はせて見ると、大體日食の6月19日曉には15cm級迄の器械にはアンサは確實に認められなかつたらしい、これ以外の事は報告が無いため全然判らない。アンサの出現附近も曇天が續いたため誰も見ておられない。只渡邊氏が7月11日曉にはアンサのスケール5と見ておられるだけで、出現は美事取り逃した形である。兎もあれ第1回の土

星アンサの協同觀測は曇天の爲綺麗に失敗に終つたと云つて良い事は當課にとり頗る遺憾な事である。来る第2回の消失(12月末)は是非共うまくキヤツチしたいものである。

土星はもう今では觀測の絶好期です。南北兩半球の縞アンサの形態衛星等充分の觀測を期待する。

金星一が觀測に適して來ました。大體金星上の斑點はごく淡いものでイル1ジョンを起す可能性が多分にあるから注意の事。半月形附近が觀測に最良で、8 cm, 級にても可成りの觀測が出来る。薄明中或は日中行ふ事は最も効果的である。が、日中 Seeing が良い事は稀だから注意を要する。觀測方法は天界第153號の107頁御参照下さい。(伊達生)

新流星群の發見!!

東亞天文協會流星課長小槇孝二郎氏及び氏の令妹和枝氏は、去る8月10日以來ペルセウス流星群の觀測をなし、ひきつゞき、同23日まで觀測した所、圖らずも魚星座フィ星附近より輻射する新流星群の活動せる事を發見した。

輻射點は

8月17.7日 (U. T.) $\alpha=16^\circ$ $\delta=+24^\circ$ $n=10$

20.7日 (U. T.) $\alpha=22.5^\circ$ $\delta=+24^\circ$ $n=10$

小槇氏は上記の20日の觀測から下の如き流星の軌道要素を計算した。

昇交點の黃徑 $\Omega=147^\circ 27'$	} 分點 1936.0年
近日點の引數 $\omega=268 44$	
軌道の傾斜角 $i=149 39$	
近日點距離 $q=0.5372$	

此の流星は8月23日には最早見られなかつた。

此の流星が今迄にない新群であるか否やを調査した所、Denning, 稻垣勝諸氏の觀測中にいくらか、これに近いものがあるけれど、同一のものとは思はれない。

本年の流星界に於ける大收穫と見てよい。

太陽課 黒點相對數報告 (1936年7月)

觀測者(觀測地)	松本(臺灣臺中高女)	久保(高知高等學校)	伊達(兵庫縣雲雀丘)	改發(神戸市關守町)	野口(大阪市北區)	前田(京都市下京區)	木邊(滋賀縣中里村)	杳掛(長野縣青木村)	清水(靜岡縣島田町)	大石(靜岡縣吉永村)	森久保(橫濱市中區)	千葉(岩手縣水澤町)
鏡徑耗	50	75	80	150	76	70	75	102	100	55	45	50
倍率	40	53	70	68	50	40	60	75	73	64	60	50
1	66	曇	雨	53	雨	曇	雨	雨	雨	曇	曇	64
2	94	曇	雨	欠曇	雨	曇	雨	曇	曇	曇	曇	曇
3	43	49	71	46	曇	30	曇	曇	曇	曇	曇	曇
4	40	曇	63	曇	曇	27	曇	曇	曇	曇	曇	曇
5	曇	曇	雨	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
6	曇	曇	雨	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
7	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
8	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
9	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
10	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
11	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
12	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
13	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
14	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
15	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
16	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
17	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
18	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
16	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
20	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
21	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
22	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
23	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
24	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
25	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
26	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
27	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
28	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
29	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
30	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
31	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
日數	5	7	18	10	19	19	22	22	19	13	17	11
平均	57	55	74	55	45	36	59	72	59	48	46	46

●觀測者の分布よろしく、欠測日は2日だけであつた。●清水氏の寫眞觀測日は斜字體で示してある。氏の寫眞は1日2回で、今第1438號まで進んでゐる。印書は叮嚀に花山に送られる。●木邊氏の報告はそのままブレテンに載せられ、黒點群は今第1170號まで達してゐるが、群に番號を附してゐる人は清水氏、杳掛氏、松本氏、前田氏、久保氏、伊達氏、野口氏がある。●杳掛氏、野口氏は群の經緯度を併せて報告。